

両親の養育態度と賞賛・叱責場面での子どもの自己教育力

篠原 弘 章

The Influence of Parental Leadership upon Children's Self-learning Motivation following Parental Approval and Disapproval

Hirofumi SHINOHARA

(Received September 2, 1996)

The purpose of this study was to investigate the influence of parental leadership behavior upon children's motivation for self-learning following parental approval and disapproval. The subjects were 267 elementary school children (fourth, fifth and six grades) in Kumamoto City. Parental leadership was divided into four types: PM-type, P-type, M-type and pm-type, based on the P-M theory. The main results were as follows:

(1) As a result of Direct Varimax-method, two factors were extracted. The first factor, which reflects avoidance for punishment, was named "Avoidance Factor".

Because the second factor expressed the facilitation of self-learning motivation for approval of deeds, it was named "Facilitation Factor".

(2) The effect of sex difference was not significant in the Avoidance Factor.

(3) A relatively large number of children under PM-type fathers showed a higher facilitation of self-learning motivation than those under pm-type fathers.

(4) There were many children with low facilitation of self-learning motivation under pm-type mothers.

(5) More girls than boys had a high avoidance motivation.

(6) There were many children with a high avoidance motivation under M-type fathers than under pm-type fathers.

(7) There was a relatively larger number of children with a high avoidance motivation under PM-type mothers than under P-type mothers.

Key word: parental attitude, self-learning, motivation, P-M leadership theory

問 題

本研究では、三隅(1966)のP-Mリーダーシップ理論にもとづいた4つのP-M養育類型が子どもの自己教育力に及ぼす効果について検討する。

ユネスコの教育開発国際委員会報告書(1972)では、「一人で行う学習の効果は、自己学習の技能を身につけ、助けとなる多くの手段を活用することによって、大きく高まる」とし、未来の学習として自己学習を重視している。

自己教育力とは、中教審の審議経過報告(1983)によれば、「主体的に学ぶ意志、態度、能力など」である。具体的には、「学習への意欲、学習の仕方、自己を教育し続ける意志」とであるとされている。水越(1985)は、「自己教育力とは、自分で自分を教育することで、(中略)、自分を客体化し教育や評価の対象にすること」としている。これに対応して河野(1985)は、学校現場用に自己教

育力育成の手引きを編集している。梶田(1985)は、自己教育力とは、「自己統制、自己学習力、自己評価と目的意識や学習意欲」を統合し、「その人独自のパーソナリティで味付けをした総括的理念である」としている。小此木(1987)の述べる自己教育力を要約すると、「日々の経験から学ぶ能力、目的意識、照合(参照)機能、自律と共感性」という4つの機能にわけられる。

しかし、本研究では、自己教育力を上のような包括的な概念で捉えるのではなく、篠原、井上(1991)が行ったように、自己教育力を日常の具体的な賞賛・叱責場面での「自己向上の学習」として捉え、「自己をよりよくしようとする意志」の学習形成過程に及ぼす両親の養育類型の効果を検討するものである。すなわち、子ども自身が父や母親より叱られたり、誉められたりしたときに、今後も「叱られるようなことはするまい」とか、「誉められるようなことをしよう」という反省と向上心への動機づけを狭義の自己教育力として操作的に定義するものである。

P-M理論によれば、PM型の親は、こどもに対して理解があり情緒的にも支持し、躰や訓練面でも厳しい態度をもつ類型である。P型の親は、躰や訓練面では厳しいが、他方、情緒的な支持が乏しい親である。M型の親は、こどもへの情緒的な支持は高いが、厳しい躰の態度をとれない親である。pm型の親は、こどもに対して情緒的な支持は乏しく、また躰で厳しく接することも少ない親である。

研究仮説は、以下のごとくである。

- 1) PM型の両親の下の子ども(男児女児ともに)には自己教育力の高い者が最も多く、pm型の両親の下の子どもでは自己教育力の低い者が多いだろう。
- 2) P型の両親とM型の両親の下では、M型の下で自己教育力の高い者が多く、P型の下では親への反発から逆に自己教育力を低めるだろう。

方 法

〈被調査者と調査期日〉本研究の被調査者は、熊本市内のR小学校4~6年生で、無答の多い者や、両親のいずれかが健在でない者は除き267名を対象とした。内訳は、4年男子35名、女子33名、5年男子47名、女子44名、6年男子52名、女子56名であった。調査手続きは、調査票を1985年11月中旬、小学校に一週間預けておき、学級毎に担任教師が1問ごとに質問を読み上げたあと児童が回答する集合調査法を用いた。

〈両親の養育態度の調査項目と類型化〉両親の養育行動の測定項目は、篠原・福山(1987)、篠原・森田(1983)と同じ20項目を用いた。これらは、子どもの躰や訓練に関するP項目10問と、情緒的支持や受容の10問で、いずれも5段階のリッカート尺度から成る。項目内容は筆者らの論文(篠原・吉本(1995))を参照のこと。調査実施後の両親の養育態度の類型化は、父親と母親それぞれについて児童ごとに算出したP尺度10問の合計点、M尺度の10項目の合計点に基づいた。具体的な方法は以下の通りである。P、M得点の全体平均をもとにして(父のP平均34.09, SD=7.95, 母のP平均37.78, SD=7.81, 父のM平均44.96, SD=9.38, 母のM平均46.96, SD=8.23)、父親のP得点は35点以上、M得点は45点以上、母親のP得点は38点以上、M得点は47点以上を、P尺度、M尺度の高低2分割の折半点とした。各尺度の高低を組み合わせることによって、従来と同様に、父母をそれぞれPM型、P型、M型、pm型の4つに類型化した。さらに、両親の4類型を組み合わせると、4×4の計16通りの類型ができる。

父母の16類型の下での被験者数はPM-PM型67人、PM-P型9人、PM-M型12人、PM-pm

型0人、P-PM型7人、P-P型18人、P-M型0人、P-pm型16人、M-PM型14人、M-P型2人、M-M型35人、M-pm型11人、pm-PM型5人、pm-P型15人、pm-M型8人、pm-pm型48人であった。これらの養育類型についての詳細な検討は、篠原・吉本(1995)の先の論文で行われている。

〈自己教育力の調査項目〉

自己教育力に関する項目は、基本的な生活習慣を中心に10項目を選定し、ある行動についてほめられた場合（賞賛による促進的動機づけ場面）とおこられた場合（叱責による回避的動機づけ場面）の2種類の場面を設定した。回答にあたっては、それぞれの場面ではどのような気持ちになるか、3つの選択肢の中から1つを選択させた。20問の質問内容と選択肢は以下のとおりである。賞賛場面は奇数の項目番号で、叱責場面は偶数の項目番号である。

Q1. 夜ねる前に歯をみがいてほめられたとき。

1. ほめられたけど、これからもみがくかどうかわからない。
2. 歯をみがくのはとうぜんだ。
3. ほめられてうれしいから、これからもみがこう。

Q2. 夜ねる前に歯をみがかなくておこられたとき。

1. おこられたから、みがきたくない。
2. おこられたから、しかたなくみがく。
3. ほんとうはみがかないといけないので、これからはみがこう。

Q3. ごはんを食べる前に手を洗ってほめられたとき。

1. ほめられたけど、これからもあらうかどうかわからない。
2. 手をあらうのはとうぜんだ。
3. ほめられてうれしいから、これからもあらおう。

Q4. ごはんを食べる前に手を洗わなくておこられたとき。

1. おこられたから、あらいたくない。
2. おこられたから、しかたなくあらおう。
3. ほんとうは手をあらわないといけないので、これからはあらおう。

Q5. 早ね早おきをしてほめられたとき。

1. ほめられたけど、これからもするかどうかわからない。
2. 早ね早おきするのはとうぜんだ。
3. ほめられてうれしいから、これからもがんばろう。

Q6. ねる時間や起きる時間が遅くておこられたとき。

1. おこられたから、早ね早おきしたくない。
2. おこられたから、しかたなく早ね早おきしよう。
3. ほんとうは早ね早おきしないといけないので、これからは気をつけよう。

Q7. 朝誰にも起こされずに自分で起きてほめられたとき。

1. ほめられたけど、これからもがんばるかどうかわからない。
2. 自分でおきるのはとうぜんだ。
3. ほめられてうれしいから、これからもがんばろう。

Q8. 朝起こさなければ自分では起きないのでおこられたとき。

1. おこられたから、これからはがんばろうとは思わない。
2. おこられたから、しかたなくがんばろう。

3. ほんとうは自分でおきなればいけないので、これからはがんばろう。
- Q9. 自分のまわりにちらかっているゴミを拾ってほめられたとき。
1. ほめられたけど、これからもひろうかどうかわからない。
 2. ゴミをひろうのはとうぜんだ。
 3. ほめられてうれしいから、これからもひろおう。
- Q10. 自分のまわりにちらかっているゴミを拾わなくておこられたとき。
1. おこられたから、ひろいたくない。
 2. おこられたから、しかたなくひろう。
 3. ほんとうはひろわなくてはいけないので、これからはひろおう。
- Q11. ごはんの時嫌いな物でも食べてほめられたとき。
1. ほめられたけど、これからも食べるかどうかわからない。
 2. 食べるのはとうぜんだ。
 3. ほめられてうれしいから、これからも食べよう。
- Q12. ごはんの時嫌いな物を残しておこられたとき。
1. おこられたから、食べたくない。
 2. おこられたから、しかたなく食べよう。
 3. ほんとうは食べなくてはいけないので、これからは食べよう。
- Q13. 目上の人と話す時、ことばづかいに気をつけてほめられたとき。
1. ほめられたけど、これからも気をつけるかどうかわからない。
 2. 気をつけるのはとうぜんだ。
 3. ほめられてうれしいから、これからもきをつけよう。
- Q14. 目上の人と話す時、言葉づかいに気をつけなくておこられたとき。
1. おこられたから、気をつけたくない。
 2. おこられたから、しかたなく気をつけよう。
 3. ほんとうは気をつけなければいけないので、これからは気をつけよう。
- Q15. あいさつが良いとほめられたとき。
1. ほめられたけど、これからもするかどうかわからない。
 2. あいさつするのはとうぜんだ。
 3. ほめられてうれしいから、これからもあいさつをしよう。
- Q16. あいさつが悪いとおこられたとき。
1. おこられたから、したくない。
 2. おこられたから、しかたなくしよう。
 3. ほんとうはあいさつをしないといけないので、これからはしよう。
- Q17. 家の手伝いをしてほめられたとき。
1. ほめられたけど、これからもするかどうかわからない。
 2. 手伝いをするのはとうぜんだ。
 3. ほめられてうれしいから、これからもしよう。
- Q18. 家の手伝いをしなくておこられたとき。
1. おこられたから、したくない。
 2. おこられたから、しかたなくしよう。
 3. ほんとうはしなければいけないので、これからはしよう。

Q19. 学校の宿題を人から言われなくてもするのでほめられたとき。

1. ほめられたけど、これからもそうするかどうかわからない。
2. いわれなくてもするのはとうぜんだ。
3. ほめられてうれしいから、これからもそうしよう。

Q20. 学校の宿題を人から言われないとしないのでおこられたとき。

1. おこられたから、気をつけたくない。
2. おこられたから、しかたなく気をつけよう。
3. ほんとうは言われなくてもしないといけないので、これからは気をつけよう。

得点化にあたっては、自己を正に強化する反応方向に高くなるように各項目の回答に1~3点をあたえた。

結果と考察

〈自己教育力項目の因子分析〉

因子分析の手続きは、ピアソンの相関行列の対角要素に共通性の推定値として各行の相関の最大値をいれた行列を使用し、直接バリマックス法によって3因子を抽出した。Table 1 にその結果を示した。全分散に対する各因子の分散は第1因子 25.1%、第2因子 19.2%、第3因子 3.2%であった。第3因子の因子分散はきわめて小さいのでここでは第2因子までを解釈することが望ましいと判断される。

Table 1 によると、第1因子に高い負荷を示す項目は、順に、Q14 言葉使いを叱られた時 (.775)、Q20 宿題で叱られた時 (.755)、Q16 挨拶を叱られた時 (.740)、Q10 ゴミを拾わないで叱られた時 (.740)、Q18 手伝いを叱られた時 (.673)、Q2 歯磨きを叱られた時 (.661)、Q12 偏食を叱られた時 (.642)、Q4 食前の手洗いを叱られた時 (.611)、Q8 朝自分で起きないで叱られた時 (.607)、Q6 就寝起床が遅いのを叱られた時 (.593) という10項目であった。

第2因子に高い負荷を示す項目は、順に、Q9 ゴミを拾って誉められた時 (.681)、Q19 宿題で誉められた時 (.680)、Q5 早寝早起きを誉められた時 (.652)、Q13 言葉使いを誉められた時 (.620)、Q7 朝自分で起きて誉められた時 (.616)、Q17 手伝いを誉められた時 (.601)、Q15 挨拶を誉められた時 (.600)、Q3 食前の手洗いを誉められた時 (.535)、Q11 嫌いな物でも食べたので誉められた時 (.502)、Q1 歯磨きを誉められた時 (.457)、という10項目である。

第1因子に高く負荷している10項目は、すべて偶数項目で叱責の場面である。よって、この因子を叱責の回避的自己教育力の因子と名づける。また、第2因子に高く負荷している10項目は、すべて奇数項目で賞賛場面である。よって、この因子を賞賛の促進的自己教育力の因子と名づける。第3因子に高く負荷している項目はQ1のみなので解釈しないでおく。

〈一般的傾向〉

Table 1 から平均点についてみると、賞賛場面を示す奇数項目ではどの項目も2.0前後、叱責場面を表す偶数項目では2.5前後を示した。このことから全体的に賞賛場面では誉められても、今後ともそのようにするとは言えないという回答の多いことがわかる。他方、叱られた場合(偶数項目)、「おこられるのはいやだから、今後そのようなことはしたくない」という回答が多いことがわかる。Table 2 からまず判ることは、誉められた場合の実行の意欲率は全体の1/3(33.3%)以下の項目が10項目中7項目もあることで、他方、叱られた場合は叱られないように今後は注意する

Table 1 自己教育力項目の平均とSD及び直接バリマックス法による因子負荷量

No.	項目の主旨	全 体		因 子 負 荷 量			共通性
		平均	SD	1	2	3	h^2
14	目上の人との言葉使い	2.62	0.60	.775	.131	-.004	.618
20	宿題を自分からしない	2.67	0.55	.755	.158	.000	.595
16	あいさつが悪い	2.70	0.56	.740	.168	-.084	.583
10	ゴミをひろわない	2.56	0.62	.740	.182	.093	.589
18	手伝いをしない	2.58	0.63	.673	.143	-.072	.479
2	歯を磨かない	2.63	0.63	.661	.061	.209	.484
12	嫌いなものは食べない	2.43	0.69	.642	.176	-.002	.443
4	食前に手を洗わない	2.08	0.57	.611	.062	.292	.462
8	朝, 自分で起きない	2.58	0.63	.607	.227	-.094	.429
6	就寝, 起床時刻が遅い	2.58	0.64	.593	.204	-.012	.393
9	ゴミをひろう	2.06	0.80	.159	.681	.056	.492
19	宿題を自分からする	2.05	0.71	.171	.680	.059	.495
5	早寝早起きをする	2.02	0.79	.109	.652	-.166	.465
13	目上の人との言葉使い	2.07	0.73	.277	.620	.098	.471
7	朝, 自分で起きる	2.10	0.75	.119	.616	-.116	.407
17	家の手伝いをする	2.14	0.73	.164	.601	-.202	.429
15	あいさつがよい	2.12	0.66	.224	.600	.019	.411
3	食前に手をあらう	2.08	0.56	.179	.535	.407	.484
11	嫌いな物でも食べる	2.00	0.76	.249	.502	.011	.314
1	寝る前に歯を磨く	2.07	0.64	.192	.457	.469	.466
因子分散				5.026	3.838	0.642	9.506
寄与率 (%)				25.1	19.2	3.2	47.5

という回答が全体の2/3(66.6%)以上を示す項目は、6項目も存在することである。すなわち、この年代の子ども達は誉められることで自己教育力を促進するよりも、「今後叱られないようにする」ために自己教育することに敏感であるといえるだろう。このように賞賛場面においては自己教育力の程度の高い選択肢3の選択率は低いが、相対的に自己教育的意欲が高いとみられる30%以上を示す項目は、Q5早寝早起きをほめられたとき(32.2%)、Q7朝自分で起きる(33.3%)、Q9ゴミを拾ってほめられたとき(34.8%)、Q11言葉使いをほめられたとき(30.3%)、Q17家の手伝いを誉められたとき(34.8%)という5項目で、賞賛による促進的自己教育力の効果が大きい。自己教育力意欲の高い項目が多い叱責場面の中で自己教育意欲が高い項目は、Q2歯磨き(70.8%)、Q4食前の手洗い(73.0%)、Q16挨拶(74.5%)、Q20宿題(70.8%)という4項目が70%を超えており、この4項目では特に叱責による回避的自己教育力の効果が大きい。

Table 2の尤度比検定では10%以下の有意な性差は、賞賛場面で2項目(Q7自分で起きる、Q11嫌いな物でも食べる)、叱責場面で7項目(Q2歯磨き、Q4食前の手洗い、Q10ゴミひろい、Q14言葉づかい、Q16挨拶、Q18手伝い、Q20宿題)の計9項目である。これらは全て男子より女子が自己教育力が高い。また、ここでも賞賛場面よりも叱責場面での自己教育力が高いと言える。

他方、学年間については、賞賛場面のQ13言葉使い、Q15挨拶、Q19宿題の3項目で10%水準で傾向差がみられ、低学年ほど賞賛による促進的自己教育力の効果が大きい。他方、叱責場面

Table 2 誉められた場合と叱られた場合の自己教育力項目での意欲率

No.	項目の主旨	全体	性別		レンジ R	L (df=1)	学 年			レンジ R	χ^2 (df=2)
			男子	女子			4年	5年	6年		
誉められた場合											
1	寝る前の歯磨き	24.0 ^u	25.4	<u>22.6</u>	2.8	0.291	23.5	27.5	<u>21.3</u>	6.2	1.036
3	食前の手洗い	19.9 ^u	<u>17.9</u>	21.8	3.9	0.637	26.5	20.9	<u>14.8</u> '	11.7	3.648
5	早寝早起き	32.2 ^u	<u>29.1</u>	35.3	6.2	1.189	33.8	36.3	<u>27.8</u>	8.5	1.749
7	朝、自分で起きる	33.3 ^u	<u>27.6</u> '	39.1 ⁺	11.5	3.977 *	35.3	33.0	<u>32.4</u>	2.9	0.164
9	ゴミをひろう	34.8	<u>33.6</u>	36.1	2.5	0.185	36.8	37.4	<u>31.5</u>	5.9	0.908
11	嫌いな物でも食べる	29.2 ^u	<u>24.6</u> '	33.8 '	9.2	2.745 +	35.3	31.9	<u>23.1</u> '	12.2	3.488
13	目上の人との言葉使い	30.3 ^u	<u>29.1</u>	31.6	2.5	0.193	35.3	36.3	<u>22.2</u> '	14.1	5.802 ⁺
15	あいさつがよい	28.5 ^u	30.6	<u>26.3</u>	4.3	0.601	39.7 ⁺	<u>24.2</u>	25.0	15.5	5.458 ⁺
17	家の手伝いをする	34.8	35.8	<u>33.8</u>	2.0	0.116	41.2	<u>31.9</u>	33.3	9.3	1.641
19	宿題を自分からする	27.7 ^u	<u>26.9</u>	28.6	1.7	0.097	38.2 ⁺	27.5	<u>21.3</u> '	16.9	5.868 ⁺
叱られた場合											
2	歯を磨かない	70.8 ^u	<u>59.0</u> '	82.7 ⁺⁺	23.7	18.628 **	<u>67.6</u>	71.4	72.2	4.6	0.445
4	食前に手を洗わない	73.0 ^u	<u>60.4</u> '	85.7 ⁺⁺	25.3	22.321 **	<u>64.7</u> '	75.8	75.9	11.2	3.102
6	就寝、起床時刻が遅い	66.7 ^u	<u>62.7</u>	70.7	8.0	1.921	<u>60.3</u>	71.4	66.7	11.1	2.161
8	朝、自分で起きない	66.3	<u>61.9</u>	70.7	8.8	2.285	<u>63.2</u>	70.3	64.8	7.1	1.063
10	ゴミをひろわない	62.5	<u>56.0</u> '	69.2 ⁺	13.2	4.988 *	<u>60.3</u>	62.6	63.9	3.6	0.230
12	嫌いなものは食べない	54.7	58.2	<u>51.1</u>	7.1	1.352	<u>51.5</u>	58.2	53.7	6.7	0.792
14	目上の人との言葉使い	68.5 ^u	<u>63.4</u> '	73.7 ⁺	10.3	3.265 +	<u>61.8</u>	65.9	75.0 '	13.2	3.862
16	あいさつが悪い	74.5 ^u	<u>65.7</u> '	83.5 ⁺⁺	17.8	11.316 **	<u>70.6</u>	75.8	75.9	5.3	0.733
18	手伝いをしない	65.9	<u>58.2</u> '	73.7 ⁺⁺	15.5	7.164 **	66.2	61.5	69.4	7.9	1.373
20	宿題を自分からしない	70.8 ^u	<u>61.9</u> '	79.7 ⁺⁺	17.8	10.308 **	<u>67.6</u>	69.2	74.1	6.5	1.001

(注) ^uは全サンプルの1/3以下の意欲率, ^uは2/3以上の意欲率。
 ゴチック体は最大値, 下線は最小値。レンジ(R)=最大値-最小値。
 尤度比検定による χ^2 の有意水準** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$
 残差分析法による有意水準++, -- $p < .01$, +, - $p < .05$, ^' $p < .10$

では高学年ほど回避的自己教育力が高まる項目が多い。

〈両親の類型との関係〉

Table 3の尤度比検定の結果から判ることは、賞賛場面よりも叱責場面において父母の類型と有意な項目が多いことである。すなわち、5%と1%以下の有意水準を示す項目の数は、父の賞賛場面で0個、叱責場面で5個（ゴミを拾わなかった、言葉使い、挨拶、手伝い、宿題）であること、また母親に類型ではそれぞれ0個と6個（就寝起床時刻、ゴミひろい、言葉使い、挨拶、手伝い、宿題）みられた。このことから子どもたちは、誉められた場合よりも叱られた場合に当の子どもの自己教育力の意欲の喚起に親の類型間に有意な相異を生じるといえる。

次に、意欲率の最高値について4類型間を検討してみる。

賞賛場面で意欲の最大値を示す項目は、父親の場合PM型で6項目（歯磨き、食前の手洗い、ゴミをひろう、早寝早起き、言葉使い、宿題）、P型で1項目（手伝い）、M型2項目（偏食、挨拶）、pm型1項目（一人で起床）であり、父の場合PM型が誉めることによって子どもの自己教育力を喚起しやすいといえる。他方、母親では最大値を示す項目は、PM型で4項目（食前の手洗い、早寝早起き、言葉使い、手伝い）、P型で1項目（宿題）、M型5項目（歯磨き、一人で起

Table 3 両親の類型と自己教育力項目の意欲率

項目の主旨	父 親				レンジ R	χ^2 (df=3)	母 親				レンジ R	χ^2 (df=3)
	PM	P	M	pm			PM	P	M	pm		
誉められた場合												
1 寝る前の歯磨き	29.5	22.0	22.6	<u>19.7</u>	9.8	2.372	21.5	27.3	30.9	<u>20.0</u>	10.9	2.620
3 食前の手洗い	26.1 [^]	22.0	16.1	<u>14.5</u>	11.6	4.207	24.7	22.7	18.2	<u>13.3</u>	11.4	3.840
5 早寝早起き	40.9 ⁺	24.4	35.5	<u>23.7</u>	17.2	7.109 ⁺	38.7 ⁻	27.3	36.4	<u>24.0</u>	14.7	5.116
7 朝、自分で起きる	30.7	<u>26.8</u>	35.5	38.2	11.4	1.999	32.3	31.8	40.0	<u>30.7</u>	9.3	1.406
9 ゴミをひろう	39.8	<u>26.8</u>	35.5	32.9	13.0	2.273	39.8	38.6	40.0	<u>22.7</u> ⁻⁻	17.3	7.142 ⁺
11 嫌いな物でも食べる	<u>27.3</u>	29.3	30.6	30.3	3.3	0.264	31.2	<u>18.2</u>	34.5	29.3	16.3	3.745
13 目上の人との言葉使い	36.4	26.8	33.9	<u>22.4</u>	14.0	4.485	35.5	31.8	34.5	<u>20.0</u> ⁻	15.5	5.731
15 あいさつがよい	30.7	24.4	35.5	<u>22.4</u>	13.1	3.446	30.1	29.5	30.9	<u>24.0</u>	6.9	1.066
17 家の手伝いをする	37.5	39.0	32.3	<u>31.6</u>	7.4	1.128	36.6	36.4	36.4	<u>30.7</u>	5.9	0.808
19 宿題を自分からする	35.2 [^]	<u>19.5</u>	27.4	23.7	15.7	4.480	30.1	34.1	29.1	<u>20.0</u> ⁻	14.1	3.551
叱られた場合												
2 歯を磨かない	73.9	<u>61.0</u>	74.2	69.7	13.2	2.615	77.4 [^]	<u>59.1</u>	67.3	72.0	18.3	5.118
4 食前に手を洗わない	76.1	68.3	82.3 [^]	<u>64.5</u> ⁻	17.8	6.485 ⁺	76.3	<u>68.2</u>	76.4	69.3	8.2	1.866
6 就寝、起床時刻が遅い	67.0	65.9	74.2	<u>60.5</u>	13.7	2.924	75.3 ⁺	59.1	72.7	<u>56.0</u> ⁻	19.3	8.979 [*]
8 朝、自分で起きない	72.7	61.0	72.6	<u>56.6</u> ⁻	16.1	6.420 ⁻	72.0	59.1	72.7	<u>58.7</u>	14.0	5.358
10 ゴミをひろわない	71.6 ⁺	48.8 ⁻	72.6 [^]	<u>51.3</u> ⁻	23.8	13.159 ^{**}	73.1 ⁺⁺	52.3	72.7 [^]	<u>48.0</u> ⁻⁻	25.1	15.667 ^{**}
12 嫌いなものは食べない	60.2	56.1	59.7	<u>43.4</u> ⁻	16.8	5.632	62.4 [^]	<u>43.2</u>	60.0	48.0	14.4	6.559 ⁺
14 目上の人との言葉使い	73.9	63.4	83.9 ⁺⁺	<u>52.6</u> ⁻⁻	31.3	17.652 ^{**}	81.7 ⁺⁺	<u>50.0</u> ⁻⁻	81.8 ⁺	53.3 ⁻⁻	31.8	27.288 ^{**}
16 あいさつが悪い	81.8 [^]	<u>63.4</u>	82.3	65.8 ⁻	18.9	10.091 [*]	84.9 ⁺⁺	68.2	81.8	<u>60.0</u> ⁻⁻	24.9	16.055 ^{**}
18 手伝いをしない	76.1 ⁺	63.4	69.4	<u>52.6</u> ⁻⁻	23.5	10.481 [*]	75.3 ⁺	59.1	72.7	<u>53.3</u> ⁻⁻	22.0	10.935 [*]
20 宿題を自分からしない	72.7	63.4	83.9 ⁺⁺	<u>61.8</u> ⁻	22.1	9.748 [*]	80.6 ⁺⁺	<u>54.5</u> ⁻⁻	80.0 [^]	61.3 ⁻⁻	26.1	15.415 ^{**}

(注)ゴシック体は最大値, 下線は最小値. レンジ(R)=最大値-最小値.

尤度比検定による χ^2 の有意水準 ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

残差分析法による有意水準 ++, -- $p < .01$, +, - $p < .05$, ^, ' $p < .10$

床、ゴミをひろう、偏食、挨拶), pm型0項目であった。従って母親の場合は父親のPM型優位と異なり, PM, M型の2類型で子どもへの動機づけが高いといえる。

叱責場面においては, 父親の場合最大値を示す項目は, PM型3項目(一人で起床, 偏食, 手伝い), P型0項目, M型7項目(歯磨き, 食前の手洗い, 就寝起床時刻, ゴミひろい, 言葉使い, 挨拶, 宿題), pm型0項目となり, M型が優位である。すなわち, 日頃やさしいM型の父親から叱られると子どもは「今後は叱られるようなことはしないでおこう」という素直に叱責回避的な動機づけが高まる。しかし, 母親では最大値を示す項目は, PM型7項目(歯磨き, 就寝起床時刻, ゴミひろい, 偏食, 挨拶, 手伝い, 宿題), P型0項目, M型3項目(食前の手洗い, 一人での起床, 言葉使い), pm型0項目となり, PM型が優位であった。従って, 母親の場合賞賛場面ではPM型とM型が同等の効果を示したが, 叱責場面ではPM型が子どもの回避的動機づけを高めやすいといえる。

類型間の以上の結果をまとめると, 父親のPM型は促進的な自己教育の動機づけに効果を持ち, 回避的な動機づけはM型で効果が大きいといえる。他方, 母親では父親とは逆に, 促進的な自己教育力ではPM型とM型で効果が大きい, 回避的な自己教育の動機づけはPM型が効果

が大きいいといえる。

〈自己教育力の4つの類型〉

回避的自己教育力の因子に含まれる10項目の合計得点（Avoidance という意味から A 得点と呼ぶ）と促進的動機づけ因子に含まれる10項目の合計得点（Facilitate という意味で F 得点と呼ぶ）をそれぞれ算出した。この平均値をもとにして、F 得点は21点以上、A 得点は27点以上のものを、それぞれ F、A と大文字で表記し、平均未満を f、a と小文字で表記する。2つの要因の高低を組み合わせると、自己教育力の類型は FA 型、Fa 型、fA 型、fa 型の4つのタイプに分類できる。

性×父×母の固定（ABC 固定）、自己教育力の固定（D 固定）というモデルの4要因の尤度比の分割モデルを用いて有意性の検討を行った。Table 4 には、従属変数としての自己教育力に促進的自己教育力（全体平均で高低の2分割）、回避的自己教育力（全体平均で高低に2分割）、促進回避の4類型を使用した場合の結果をまとめた。なお、学年要因も考慮した5要因モデルも実施したが、学年要因では有意差がみられなかったので4要因モデルの結果を示した。Table 5 は促進的または回避的自己教育力の諸集計について、Table 6 には促進回避の4類型に関する諸集計についての残差分析の結果を示した。

Table 4 自己教育力についての4要因尤度比検定の結果

変動因	df	促進的	回避的	促進回避による4類型	
		χ^2	χ^2	df	χ^2
性別(A)×自己教育力(D)	1	0.84	8.61 **	3	9.51 *
父の類型(B)×D	3	9.40 *	8.38 *	9	15.96 +
母の類型(C)×D	3	7.92 *	15.55 **	9	21.52 *
A×B×D	3	2.55	3.55	9	8.40
A×C×D	3	3.04	2.21	9	6.42
B×C×D	7 ^b	0.37	<0 ^a	21	14.98
A×B×C×D	7	6.03	<0 ^a	21	12.88
	27 ^c	30.15	38.58	81	89.67

^a χ^2 が負となるので、このモデルは厳密にはこの交互作用の検定には不適。

+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

^b 0となる周辺度数が2ヶ所あったため df が2だけ減少している。

^c 0となる周辺度数が4ヶ所あったため df が4だけ減少している。

Table 4 によれば、促進的自己教育力については、父の類型と母の類型という2つの変動源が有意である ($p < .05$)。回避的自己教育力は、性差、父の類型、母親の類型の3つの変動源が有意である。また、自己教育力の4類型については、父の類型のみが10%の有意水準、性差と母の類型は5%水準で有意であった。他の3要因以上の変動源はすべて有意でなかった。

Table 5.1 の回避的自己教育力の性差については、男子 (49.2%) より女子 (67.0%) に回避的自己教育力が高い。また Table 6.1 から、促進回避型 (FA) が女子 (39.1%) に多く、男子 (26.1%) には少ないといえる。よって男子より女子の方が一般に賞賛や叱責によって喚起される自己教育力が高い。

Table 5.2 に示すように、父の類型と促進的および回避的自己教育力は5%水準で有意である。また、Table 6.2 によれば、父の類型と自己教育力4類型の間では10%水準で有意である。

Table 5 二種類の自己教育力についての残差分析 (++, -- $p < .01$; +, - $p < .05$)

変動源	計(N=267)	促進的自己教育力		回避的自己教育力		
		高(N=119)	低(N=148)	高(N=155)	低(N=112)	
5.1 性別×自己教育力 (AD 表)						
男子	134	56(41.8)	78(58.2)	66(49.2)--	68(50.8)++	
女子	133	63(47.4)	70(52.6)	89(67.0)++	44(33.0)--	
		$\chi_L^2=0.84, df=1, ns, \phi=.06$		$\chi_L^2=8.61, df=1, p<.01, \phi=.18$		
5.2 父の類型×自己教育力 (BD 表)						
PM	88	48(54.6)+	40(45.4)-	55(62.5)	33(37.5)	
P	41	17(41.4)	24(58.6)	21(51.3)	20(48.7)	
M	62	30(48.3)	32(51.7)	43(69.4)+	19(30.6)-	
pm	76	24(31.5)--	52(68.5)++	36(47.3)-	40(52.7)+	
		$\chi_L^2=9.40, df=3, p<.05, \phi=.19$		$\chi_L^2=8.38, df=3, p<.05, \phi=.18$		
5.3 母の類型×自己教育力 (CD 表)						
PM	93	49(52.7)	44(47.3)	63(67.8)+	30(32.2)-	
P	44	17(38.6)	27(61.4)	17(38.6)--	27(61.4)++	
M	55	28(50.0)	27(49.0)	38(69.1)	17(30.9)	
pm	75	25(33.3)-	50(66.7)+	37(49.3)	38(50.7)	
		$\chi_L^2=7.92, df=3, p<.05, \phi=.17$		$\chi_L^2=15.55, df=3, p<.01, \phi=.24$		
5.4 性別×父の類型×自己教育力 (ABD 表)						
男子	PM	57	30(52.7)	27(47.3)	33(57.9)	24(42.1)
	P	24	9(37.5)	15(62.5)	11(45.8)	13(54.2)
	M	24	11(45.8)	13(54.2)	12(50.0)	12(50.0)
	pm	29	6(20.6)--	23(79.4)++	10(34.4)--	19(65.6)++
女子	PM	31	18(58.2)	13(41.8)	22(71.0)	9(29.0)
	P	17	8(47.0)	9(53.0)	10(58.9)	7(41.1)
	M	38	19(50.0)	19(50.0)	31(81.6)++	7(18.4)--
	pm	47	18(38.2)	29(61.8)	26(56.5)	21(45.5)
		$\chi_L^2=12.79, df=7, p<.10, \phi=.21$		$\chi_L^2=20.54, df=7, p<.01, \phi=.27$		
5.5 性別×母の類型×自己教育力 (ACD 表)						
男子	PM	54	28(51.9)	26(48.1)	33(61.2)	21(38.8)
	P	18	8(44.4)	10(55.6)	5(27.7)--	13(72.3)++
	M	21	10(47.6)	11(52.4)	11(52.4)	10(47.6)
	pm	41	10(24.3)--	31(75.7)++	17(41.5)	24(58.5)
女子	PM	39	21(53.9)	18(46.1)	30(77.0)++	9(23.0)--
	P	26	9(34.6)	17(65.4)	12(46.1)	14(53.9)
	M	34	18(53.0)	16(47.0)	27(79.5)++	7(20.5)--
	pm	34	15(44.1)	19(55.9)	20(58.9)	14(41.1)
		$\chi_L^2=11.80, df=7, ns., \phi=.21$		$\chi_L^2=26.37, df=7, p<.001, \phi=.31$		
5.6 父×母の類型×自己教育力 (BCD 表)						
PM	PM	67	34(50.8)	33(49.2)	45(67.2)	22(32.8)
	P	9	5(55.6)	4(44.4)	2(22.2)--	7(77.8)++
	M	12	9(75.0)+	3(25.0)-	8(66.7)	4(33.3)
	pm	0	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
P	PM	7	3(42.8)	4(57.2)	4(57.2)	3(42.8)
	P	18	7(38.8)	11(61.2)	9(50.0)	9(50.0)
	M	0	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
	pm	16	7(43.7)	9(56.3)	8(50.0)	8(50.0)

M	PM	14	10(71.5) ⁺	4(28.5) ⁻	11(78.6)	3(21.4)
	P	2	1(50.0)	1(50.0)	0(0)	2(100.0)
	M	35	16(45.7)	19(54.3)	25(71.5)	10(28.5)
	pm	11	3(27.2)	8(72.8)	7(63.7)	4(36.3)
pm	PM	5	2(40.0)	3(60.0)	3(60.0)	2(40.0)
	P	15	4(26.6)	11(73.4)	6(40.0)	9(60.0)
	M	8	3(37.5)	5(62.5)	5(62.5)	3(37.5)
	pm	48	15(31.2) ⁻	33(68.8) ⁺	22(45.8)	26(54.2)

$\chi^2=17.69, df=13, ns., \phi=.25$ $\chi^2=22.30, df=13, p<.10, \phi=.28$

5.7 性別×父×母の類型×自己教育力 (ABCD 表)

男 子	PM	PM	44	22(50.0)	22(50.0)	28(63.7)	16(36.3)
		P	6	3(50.0)	3(50.0)	1(16.6)	5(83.4)
		M	7	5(71.5)	2(28.5)	4(57.2)	3(42.8)
		pm	0	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
	P	PM	2	1(50.0)	1(50.0)	1(50.0)	1(50.0)
		P	8	3(37.5)	5(62.5)	3(37.5)	5(62.5)
		M	0	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
		pm	14	5(35.7)	9(64.3)	7(50.0)	7(50.0)
	M	PM	5	4(80.0)	1(20.0)	3(60.0)	2(40.0)
		P	1	1(100.0)	0(0)	0(0)	1(100.0)
		M	13	5(38.4)	8(61.6)	7(53.9)	6(46.1)
		pm	5	1(20.0)	4(80.0)	2(40.0)	3(60.0)
pm	PM	3	1(33.3)	2(66.7)	1(33.3)	2(66.7)	
	P	3	1(33.3)	2(66.7)	1(33.3)	2(66.7)	
	M	1	0(0)	1(100.0)	0(0)	1(100.0)	
	pm	22	4(18.1) ⁻⁻	18(81.9)	8(36.3) ⁻⁻	14(63.7) ⁺⁺	
女 子	PM	PM	23	12(52.2)	11(47.8)	17(74.0)	6(26.0)
		P	3	2(66.7)	1(33.3)	1(33.3)	2(66.7)
		M	5	4(80.0)	1(20.0)	4(80.0)	1(20.0)
		pm	0	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
	P	PM	5	2(40.0)	3(60.0)	3(60.0)	2(40.0)
		P	10	4(40.0)	6(60.0)	6(60.0)	4(40.0)
		M	0	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
		pm	2	2(100.0)	0(0)	1(50.0)	1(50.0)
	M	PM	9	6(66.7)	3(33.3)	8(88.9)	1(11.1)
		P	1	0(0)	1(100.0)	0(0)	1(100.0)
		M	22	11(50.0)	11(50.0)	18(81.9) ⁺⁺	4(18.1) ⁻⁻
		pm	6	2(33.3)	4(66.7)	5(83.3)	1(16.7)
pm	PM	2	1(50.0)	1(50.0)	2(100.0)	0(0)	
	P	12	3(25.0)	9(75.0)	5(41.6)	7(58.4)	
	M	7	3(42.8)	4(57.2)	5(71.5)	2(28.5)	
	pm		11(42.3)	15(57.7)	14(53.9)	12(46.1)	

$\chi^2=30.15, df=27, ns., \phi=.32$ $\chi^2=38.58, df=27, p<.10, \phi=.36$

計 267(100.0) 119(44.6) 148(55.4) 155(58.1) 112(41.9)

(注) ()内は%

促進的自己教育力は、父親が PM 型の時に 54.6%と多く、pm 型の時 31.5%と少ない。回避的自己教育力については父親が M 型のとき 69.4%と多く、pm 型では 47.3%と少ない。Table 6.2 に示すように自己教育力の 4 類型と父の類型に関しては、PM 型のとき、FA 型が 40.9%と多く、pm 型には 22.4%と少ない。M 型のときは無反応型の fa 型が 19.4%と少なく、pm 型のとき fa 型が 43.4%と多くなる。PM 型や pm 型の効果は従来の傾向に沿ったものだが、ここでは、優しいタイプである M 型の父親から叱られると、こどもの回避的自己教育力が高まる者が多いことが注目される。

Table 5.3 によれば、母親が pm 型のときは促進的自己教育力が高いものが 33.3% ($p < .05$) と少ない。回避的自己教育力については PM 型の母親が効果が高く (67.8%, $p < .05$)、日頃からやかましいタイプの P 型の母親ではむしろ逆効果で回避的自己教育力が低い者が 61.4%と多くなる。Table 6.3 によれば、母親が PM 型 (41.9%, $p < .05$)、M 型 (43.6%, $p < .05$) の場合、促進回避型 (FA) が多い。また、母親が P 型 (20.5%) や pm 型 (20.0%, $p < .01$) のとき FA 型が少ない。

ここで特徴的なことは、やかまし屋の P 型の母親の下では無反応型 (fa) が 43.2% ($p < .05$) と有意に多いことが注目される。つまり、ほめたり叱ったりしても子どもの自己教育力の効果が低いのである。

Table 4 の変動源 $A \times B \times D$ は有意でなかったが、Table 5.4、Table 6.4 の性差 (A) \times 父の類型 (B) \times 自己教育力 (D) の残差分析では有意なセルが見いだされた。したがって、以下にこれらの傾向をみていく。

Table 5.4 の残差分析によれば、男子で父親が pm 型の時、促進的自己教育力の低い者 (79.4%, $p < .01$) や回避的自己教育力の低い者が 65.6% ($p < .01$) ときわめて多い。他方、女子には回避的自己教育力が高い者が M 型の母親の下で 81.6% ($p < .01$) と極めて多い。Table 6.4 によれば、自己教育力の 4 類型では、女子において PM 型と M 型の父親の下で促進回避型 (FA) がそれぞれ 48.4%と 47.4%と多い ($p < .05$)。他方男子では、父親が M 型の場合に促進型 (Fa) が 25.0% ($p < .05$) と多く、pm 型の場合に無反応型 (fa) が 58.6% ($p < .01$) と多く、FA 型は 13.8% ($p < .01$) と少ない。ここでは、女子と異なって男子が父親のやかましい P 型の下で誉められた場合、促進型の自己教育力が相対的に高まっていることが注目される。また、父の類型 \times 自己教育力を見ると、父親の pm 型のときの傾向は、Table 5.4 で明らかになったように男子に起因したことがわかる。すなわち、男子は女子よりも、同性である父親が pm 型として子どもの躰に無関心のとき、自己教育力を低める方向に作用するといえる。

また、女子は、男子より PM 型や M 型の下で FA 型が多いことから、父親の M 次元の情緒的で、包容力のあるリーダーシップ行動が、女子の促進的および回避的な 2 つの自己教育力の動機づけを高める傾向がある。

Table 5.5、Table 6.5 の性差 \times 母の類型 \times 自己教育力の残差分析を基に、三者の連関を考察していこう。Table 5.5 によれば、促進的自己教育力については、男子においてのみ有意なセルが見いだされた。すなわち、母親が pm 型のときは男子に促進的自己教育力の低い者が 75.7% ($p < .01$) と極めて多い。回避的自己教育力では、女子において母親が PM 型 (77.0%) もしくは M 型 (79.5%) のとき回避的自己教育力が高い者が多い ($p < .01$)。他方男子では、母親が P 型のとき回避的自己教育力の低い者が 72.3% ($p < .01$) と多い。

Table 6.5 によれば、男子では、母親が P 型のとき、回避型が 27.8%と多く ($p < .05$)、pm 型のとき、FA 型が 12.2% ($p < .01$) と少なく、無反応型の fa 型が 46.3% ($p < .05$) と多くなる。女子では母親が PM 型 (48.7%)、M 型 (50.0%) のとき促進回避型が多く ($p < .05$)、無反応型がそれぞれ 17.9%、17.6%と少なくなっている。

Table 6 自己教育力の4類型についての残差分析(++, -- $p < .01$; +, - $p < .05$)

変動源	自己教育力の4類型					
	全体 N=267	促進回避型(FA) N=87	促進型(Fa) N=32	回避型(fa) N=68	無反応型(fa) N=80	
6.1 性別×自己教育力 (AD 表)						
男子	134	35(26.1) ⁻	21(15.7)	31(23.1)	47(35.1)	
女子	133	52(39.1) ⁺	11(8.3)	37(27.8)	33(24.8)	
		$\chi^2=9.51, df=3, p < .05, \phi = .19$				
6.2 父の類型×自己教育力 (BD 表)						
PM	88	36(40.9) ⁺	12(13.6)	19(21.6)	21(23.9)	
P	41	11(26.8)	6(14.6)	10(24.4)	14(34.1)	
M	62	23(37.1)	7(11.3)	20(32.3)	12(19.4) ⁻	
pm	76	17(22.4) ⁻	7(9.2)	19(25.0)	33(43.4) ⁺⁺	
		$\chi^2=15.96, df=9, p < .10, \phi = .14$				
6.3 母の類型×自己教育力 (CD 表)						
PM	93	39(41.9) ⁺	10(10.8)	24(25.8)	20(21.5) ⁻	
P	44	9(20.5)	8(18.2)	8(18.2)	19(43.2) ⁺	
M	55	24(43.6) ⁺	4(2.3)	14(25.5)	13(23.6)	
pm	75	15(20.0) ⁻⁻	10(13.3)	22(29.3)	28(37.3)	
		$\chi^2=21.52, df=9, p < .05, \phi = .16$				
6.4 性別×父の類型×自己教育力 (ABD 表)						
男子	PM	57	21(36.8)	9(15.8)	12(21.1)	15(26.3)
	P	24	5(20.8)	4(16.7)	6(25.0)	9(37.5)
	M	24	5(20.8)	6(25.0) ⁺	7(29.2)	6(25.0)
	pm	29	4(13.8) ⁻	2(6.9)	6(20.7)	17(58.6) ⁺⁺
女子	PM	31	15(48.4) ⁺	3(9.7)	7(22.6)	6(19.4)
	P	17	6(35.3)	2(11.8)	4(23.5)	5(29.4)
	M	38	18(47.4) ⁺	1(2.6)	13(34.2)	6(15.8) ⁻
	pm	47	13(27.7)	5(10.6)	13(27.7)	16(34.0)
		$\chi^2=33.87, df=21, p < .05, \phi = .21$				
6.5 性別×母の類型×自己教育力 (ACD 表)						
男子	PM	54	20(37.0)	8(14.8)	13(24.1)	13(24.1)
	P	18	3(16.7)	5(27.8) ⁺	2(11.1)	8(44.4)
	M	21	7(33.3)	3(14.3)	4(19.0)	7(33.3)
	pm	41	5(12.2) ⁻⁻	5(12.2)	12(29.3)	19(46.3) ⁺
女子	PM	39	19(48.7) ⁺	2(5.1)	11(28.2)	7(17.9)
	P	26	6(21.1)	3(11.5)	6(23.1)	11(42.3)
	M	34	17(50.0) ⁺	1(2.9)	10(29.4)	6(17.6)
	pm	34	10(29.4)	5(14.7)	10(29.4)	9(26.5)
		$\chi^2=37.45, df=21, p < .05, \phi = .21$				
6.6 父×母の類型×自己教育力 (BCD 表)						
PM	PM	67	26(39.8)	8(11.9)	19(28.4)	14(20.9)
	P	9	2(22.2)	3(33.3) ⁺	0(0.0)	4(44.4)
	M	12	8(66.7) ⁺⁺	1(8.3)	0(0.0) ⁻	3(25.0)
	pm	0	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
P	PM	7	3(42.9)	0(0.0)	1(14.3)	3(42.9)
	P	18	4(22.2)	3(16.7)	5(27.8)	6(33.3)
	M	0	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
	pm	16	4(25.0)	3(18.8)	4(25.0)	5(31.3)

M	PM	14	8(57.1) ⁺	2(14.3)	3(21.4)	1(7.1)
	P	2	0(0.0)	1(50.0)	0(0.0)	1(50.0)
	M	35	13(37.1)	3(8.6)	12(34.3)	7(20.0)
	pm	11	2(18.2)	1(9.1)	5(45.5)	3(27.3)
pm	PM	5	2(40.0)	0(0.0)	1(20.0)	2(40.0)
	P	15	3(20.0)	1(6.7)	3(20.0)	8(53.3) ⁺
	M	8	3(37.5)	0(0.0)	2(25.0)	3(37.5)
	pm	48	9(18.8) ⁻	6(12.5)	13(27.1)	20(41.7) ⁺

$\chi_1^2=52.47, df=39, ns., \phi=.24$

6.7 性別×父×母の類型×自己教育力 (ABCD 表)

男 子	PM	PM	44	16(36.4)	6(13.6)	12(27.3)	10(22.7)
		P	6	1(16.7)	2(33.3)	0(0.0)	3(50.0)
		M	7	4(57.1)	1(14.3)	0(0.0)	2(28.6)
		pm	0	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
	P	PM	2	1(50.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(50.0)
		P	8	1(12.5)	2(25.0)	2(25.0)	3(37.5)
		M	0	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
		pm	14	3(21.4)	2(14.3)	4(28.6)	5(35.7)
	M	PM	5	2(40.0)	2(40.0)	1(20.0)	0(0.0)
		P	1	0(0.0)	1(100.0) ⁺⁺	0(0.0)	0(0.0)
		M	13	3(23.1)	2(15.4)	4(30.8)	4(30.8)
		pm	5	0(0.0)	1(20.0)	2(40.0)	2(40.0)
pm	PM	3	1(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	2(66.7)	
	P	3	1(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	2(66.7)	
	M	1	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)	
	pm	22	2(9.1) ⁻	2(9.1)	6(27.3)	12(54.5) ⁺⁺	
女 子	PM	PM	23	10(43.5)	2(8.7)	7(30.4)	4(17.4)
		P	3	1(33.3)	1(33.3)	0(0.0)	1(33.3)
		M	5	4(80.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(20.0)
		pm	0	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
	P	PM	5	2(40.0) ⁺	0(0.0)	1(20.0)	2(40.0)
		P	10	3(30.0)	1(10.0)	3(30.0)	3(30.0)
		M	0	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
		pm	2	1(50.0)	1(50.0)	0(0.0)	0(0.0)
	M	PM	9	6(66.7) ⁺	0(0.0)	2(22.2)	1(11.1)
		P	1	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)
		M	22	10(45.5)	1(4.5)	8(36.4)	3(13.6)
		pm	6	2(33.3)	0(0.0)	3(50.0)	1(16.7)
pm	PM	2	1(50.0)	0(0.0)	1(50.0)	0(0.0)	
	P	12	2(16.7)	1(8.3)	3(15.0)	6(50.0)	
	M	7	3(42.9)	0(0.0)	2(28.6)	2(28.6)	
	pm	26	7(26.9)	4(15.4)	7(26.9)	8(30.8)	

$\chi_1^2=89.67, df=81, ns., \phi=.32$

計 267(100.0) 87(32.5) 32(12.0) 68(25.5) 80(30.0)

(注) ()内は%

前述の母の類型と自己教育力の関係における、PM型とM型の傾向は、Table 5.5 からわかるように女子に起因するものであり、pm型の反応傾向は、男子に起因することがわかる。ここでも父親の場合と同様に母親の場合でも、男子において養育への無関心がその自己教育力を低めるマイナス方向に作用し、他方女子においては、理解、愛情のM次元行動の高いことがこどもの自己教育力を高める効果をもつことがわかる。

Table 4 の変動源 $B \times C \times D$ は、有意でなかったが、以下には Table 5.6 と Table 6.6 の両親の類型を組み合わせたBCD集計の残差分析結果から検討していく。

Table 5.6 では集計表のセルが32個とその個数が多くなるため、セルに落ちる度数が少なくなるため、必ずしも安定した信頼できる度数とはいえないが、考察を進めていく。

両親の16類型のうちPM-PM型、pm-pm型のケースは、度数が多いので結果の安定性は高い。PM-PM型の場合、残差分析では有意水準に達していないが、促進的自己教育力には高群と低群の割合に差がみられないが、回避的自己教育力においては高群が67.2%、低群は32.8%と大きな差がみられる。pm-pm型では、促進的自己教育力において低群が有意に68.8%と多い ($p < .05$)。また、残差分析で有意なセルは、PM-M型で促進的自己教育力の高い者が75.0%と多く ($p < .05$)、同様にM-PM型でも71.5%と多い ($p < .05$)。さらに、PM-P型では回避的自己教育力の低い者が77.8%と多い ($p < .01$)。

Table 6.6 によれば、4類型の自己教育力についてはPM-PM型は有意ではないが、促進回避型が39.8%と多く、促進型(11.9%)や無反応型(20.9%)は少ない。pm-pm型は、有意に促進回避型が18.8% ($p < .05$) と少なく、無反応型が41.7% ($p < .05$) と多い。また、有意にPM-M型(66.7%, $p < .01$)、M-PM型57.1% ($p < .05$) の場合には促進回避型が多く、pm-P型の場合に無反応型が53.3% ($p < .05$) と多い。

両親のこれらの結果から判断されることは、父母の組み合わせが、PM-PM型、あるいはPM-M型、M-PM型の場合、つまり、両親がともに高いM次元の機能を持ち、どちらか一方がPM型の場合、こどもの自己教育力が高められていることであろう。

Table 5.7 および Table 6.7 は自己教育力に及ぼす性別と両親の16類型の効果を検討したものであるが、セルの個数は64個または128個という多くのセルとなり、そこに落ちる度数も必然的に少なくなるので、分析結果の安定性が少ない。故に、ここでは分析結果を表としてのみ提示するにとどめた。

全体的考察

本研究は、両親の養育態度が、子どもの自己教育力に影響を与えるだろうという仮説の下に、PMリーダーシップ理論にもとづき、PM-PM型の両親は子どもの自己教育力にプラスの効果をもたらし、pm-pm型の両親はネガティブな影響を与えるであろうという仮説を検討してきた。

以下に、自己教育力について考察をすすめていこう。

男女の比較では、自己教育力は女子が男子より高かった。これは、女子が男子よりも一般に情緒的で内向的、潔癖、道徳的な一般傾向の反映であろう。アイゼンクによれば、外向型よりも内向型が条件付けられやすいと言われている。

父親と性別を無視して母親の類型別にみていくと、ここでも、篠原・吉本(1995)の基本的な生活習慣と同様な傾向がみられ、PM型やM型の父母の下の子どもは、誉められたり叱ったりされ

ることによって自己教育力を高め、P型とpm型の父母は、自己教育力を低下させた。

子どもの性別と親の類型との交互作用は、統計的な有意差は認められなかったが、以下のような傾向がみられた。

男子と女子では、特徴がはっきり分かれた。男子は、父母いずれもPM型が最もプラスの影響を与え、pm型が最もマイナスの影響を与えていた。

つまり、男子の場合、父親、母親ともに、子どもをよく理解した上で、厳しくかつ優しく接することが、子どもの自己教育力を高めるが、他方、親が無関心であることは、誉めたり叱ったりしても子どもの自己教育力の効果は高めないのである。

女子の場合、父親は、男子と同様にPM型がプラスの影響を与え、pm型がマイナスの影響を与えている。母親は、M型が最もプラスの影響を与え、P型が最もマイナスの影響を与えている。つまり、女子には、父親は厳しくかつ優しく接することが、子どもの自己教育力を高め、無関心であることが自己教育力を低める。母親は優しく接することが、自己教育力を高め、厳しいだけでは子どもの自己教育力を低めるのである。

両親の組み合わせでは、性別ごとに検討するにはサンプル数が小さくなるため解釈を保留し、男女をプールして検討した。

父母の16類型のうち、父親の養育態度の望ましさと母親の養育態度の望ましさがあいまって、両親ともに優しさと厳しさを兼ね備えた家庭(PM-PM型)、母親は優しいだけだが、父親が両方を兼ね備えた家庭(PM-M型)、父親は優しいだけだが、母親が両方を兼ね備えた家庭(M-PM型)という3類型が、誉めたり叱ったりした場合、子どもの自己教育力を高めている。そして、両親ともに無関心である家庭(pm-pm型)、父親は無関心であり母親は厳しいだけである家庭(pm-P型)という2類型では、子どもの自己教育力を低めている。

賞賛や叱責場面で生じる子どもの自己教育力への動機づけ効果は、両親の子どもへの理解や優しさが必要条件であり、厳しさは、家庭のどちらかの親が少なくとも1人が果たしている必要があるようである。もちろん、両親ともにP機能とM機能の2つの機能が備えられたPM型であれば効果は大であろう。

以上のことから、PM-PM型の両親は子どもの自己教育力を高め、pm-pm型の両親は子どもの自己教育力を低めるといえる。P型の母親が女兒の自己教育力を低めることについても検証されたといえる。P型の父親が男児の自己教育力を低めるということについては、はっきりとはいえなかった。

本研究を通して推察されることは、親と子どもの間で大切な機能はM機能に内包されている子どもへの愛情である。親の愛情を感じとって育った子どもは、そうでない子どもと比べてプラスの自己教育力をもつであろう。さらに生き方の方向性を示す厳しいP機能が加われば、子どもは、他者からの賞賛や叱責に対して素直な受容と自己反省力を強化され自己を律していく。そして、自主性をもった自立した人間に育っていくであろう。子どもの躰にあたって、親が子どもに無関心の場合、そうした子どもは自己教育力を強化されることが少ないために、自己教育力の低下へつながるであろう。

要 約

本研究は、両親の養育態度が子どもの自己教育力に及ぼす影響について明らかにすることを試

みた。

まず、両親の養育態度に関する 32 項目と自己教育力に関する 20 項目を含む質問紙を作成した。なお、項目の選択肢は、両親の養育態度項目が 5 段階評定、自己教育力項目は 3 段階評定であった。被験者は、熊本市内の R 小学校の 4～6 年生の男女 267 名である。

各質問セットについて直接バリマックス法による因子分析を行った。因子分析にあたっては、ピアソンの相関行列の主対角要素に各行の最大の相関値を共通性の推定値として入れて因子の抽出を行った。賞賛と叱責場面での自己教育力項目の因子分析では、促進的動機づけの因子 (Facilitation Factor) と、回避的動機づけの因子 (Avoidance Factor) という 2 つの因子が見いだされた。

両親の養育類型は、従来の研究と同様に、P、M 得点の全体平均を基に PM 型、P 型、M 型、pm 型の 4 類型に分類した。

回避的自己教育力の因子の要因得点 (A 得点) と促進的因子の要因得点 (F 得点)、それぞれの全体平均に基づいて、両親の養育類型の分類法と同様に、FA 型、Fa 型、fA 型、fa 型の 4 類型に分類した。自己教育力についての主たる結果は、以下の通りである。

- 1) 回避的自己教育力については性差は見いだされなかった。
- 2) 父親については pm 型の親の下よりも PM 型の下で促進的自己教育力の高い児童が多かった。
- 3) 母親については、pm 型において促進的自己教育力の低い児童が多かった。
- 4) 男児よりも女児において、回避的自己教育力の高い児童が多かった。
- 5) 父親については、pm 型の父親の下よりも M 型の下で回避的自己教育力の高い児童が多かった。
- 6) 母親については、pm 型の母親よりも PM 型において回避的自己教育力の高い児童が多かった。

[付記]

本研究は、筆者が 1990 年の九州心理学会で、「両親の養育態度と児童の自己教育力について—賞賛・叱責場面について」(九州心理学会第 51 回発表論文集, 63 頁) と題して発表したものを加筆補正したものである。

引用文献

- Edgar Faure, et al 1973 Learning to be. UNESCO, *Ontario Institute for Studies in Education*. 国立教育研究所フォール報告書検討委員会訳 1975 「未来の学習」, 第一法規。
- 古川綾子, 三隅二不二, 篠原弘章 1969 親の PM 式リーダーシップ測定(1) 日本心理学会第 23 回大会発表論文集, 293.
- 古川綾子, 篠原弘章 1970 親子関係—因子論的研究, 日本グループダイナミクス学会第 18 回大会発表
- 古川綾子 1973 両親のリーダーシップ行動認知に関する発達心理学的研究, 教育心理学研究, 22(2), 69-79.
- 梶田叡一 1985 自己教育への教育, 明治図書。
- 河野重男 1985 小学校自己教育力育成の手引き, 明治図書
- 木此木啓吾 1987 北尾倫彦編「自己教育を考える」, pp.188-189, 図書文化。
- 古賀啓子, 篠原弘章 1994 雲仙普賢岳災害後の子どもの生活行動の変化, 九州心理学会第 55 回大会発表

- 論文集, 22.
- 小嶋秀夫 1970 親の行動インベントリー (PBI) の検討, 金沢大学教育学部紀要, 16, 129-144
- Schaefer, E. S., 1959 A circumplex model for maternal behavior, *J. of Abnorm. Soc. Psychol.*, 59, 226-235.
- Schaefer, E. S., 1965 Child's Reports of Parental Behavior Inventory, *Child Development*, 36, 413-424.
- 篠原弘章, 福山久子 1987 両親の養育態度が児童の達成動機と学校不安に及ぼす影響について, 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 36, 257-273.
- 篠原弘章, 森田真美 1989 児童の認知にもとづく両親の養育行動とパワーについて, 熊本大学教育実践研究, 人文科学, 6, 113-131.
- 篠原弘章, 井上大介 1991 両親の養育態度が児童の自己教育力に及ぼす影響について—とくに友人やきょうだいの賞賛・叱責場面について, 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 40, 305-324.
- 篠原弘章 1994 雲仙普賢岳災害が家族集団および学級集団に及ぼす影響, 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 43, 227-246.
- 篠原弘章, 吉本逸子 1995 両親の養育態度と子どもの基本的な生活習慣, 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 44, 239-257.
- 三隅二不二 1966 新しいリーダーシップ 集団指導の行動科学, ダイアモンド社.
- 三隅二不二 1978 リーダーシップ行動の科学, 有斐閣
- 文部省 1983 文部省中央教育審議会「教育内容等小委員会審議経過報告」
- 文部省 1985 小学校における基本的な生活習慣の指導—望ましいしつけの工夫